

水稲新品種「カツラワセ」について

岩下友記・町田道正・山川恵久・土井 修

松元幸男・上原裕美・*新屋 明

(鹿児島県農業試験場・*同大隅支場)

水稲西南53号は、昭和53年度から高知県において奨励品種に採用され、通称名を「カツラワセ」として普及に移されることになったので、育成経過と特性概要をのべて参考に供したい。なお本品種は交配から個体選抜までは農林省中国農業試験場において島国土氏らによって育成されたものである。

来歴ならびに育成経過

カツラワセは昭和38年農林省中国農業試験場において(ふ系71号×ふ系67号)F₁×コシヒカリ)F₁を母とし、コシヒカリを戻し交配して、冬期温室内でF₁養成を行ない、昭和39年ガラス室内でF₂-F₃の世代促進を行なった。昭和40年F₄でB₁個体別に穂選抜で集団採種を行ない昭和41年広島県農業試験場高冷地支場のほ場でF₅の個体選抜がなされた。

昭和42年F₆から鹿児島県農業試験場において早期栽培で系統育種法によって選抜個定をはかり、昭和43年「か系639」の系統番号を付し特性検定試験、生産力検定試験に供試した。昭和48年「西南53号」の系統名で関係府県に配布し、地方的適否を確かめてきたが、昭和53年F₁₇で水稲農林250号として登録、通称名を「カツラワセ」と命名された。

特性の概要

1. 形態的特性

幼苗は葉身がやや短く葉色は濃い。稈長はコシヒカリに比較して10cm程度短く、穂長、穂数はほぼ同程度の短稈中間型のうち種である。

成熟期には正葉が直立し草状良好で熟色も良い。芒はなく、ふ先色は白、脱粒性は難、粒着の疎密は中位で、玄米の形状はやや丸味をおび、粒の大小はやや大きい。玄米の見かけの品質は腹白がまれにみられるが、心白、乳白、背白などはきわめて少なく、粒の揃いがよくコシヒカリやハウネワセに近い品質である。

2. 生態的特性

出穂期および成熟期はコシヒカリより5~6日程度早い早生種で、早期栽培地帯では早生の早に類する。稈は

コシヒカリより太く耐倒伏性についてはかなりの強さをもっている。

いもち病抵抗性遺伝子はPi-Z, Pi-aをもつものと推定され、葉いもち病、穂いもち病ともにコシヒカリ、ホ

第1表 一般特性

品種名		カツラワセ	コシヒカリ
形質	品種名	カツラワセ	コシヒカリ
熟期	別型	早の早	早の中
草の細太		中間	中間
程の剛柔		中	中
出穂期(月・日)		6・30	7・5
成熟期(月・日)		8・1	8・7
稈長(cm)		76	86
穂長(cm)		18.2	18.2
穂数(m ² 当)		398	414
芒の有無	長短	ム	ム
ふ先色		白	白
粒着疎密		やや密	中
脱粒性		難	難
穂発芽性		難	難
耐倒伏性		中	弱
耐病性	葉いもち	強	弱
	穂いもち	強	弱
	白葉枯病	中	中
	紋枯病	やや弱	中
	縞葉枯病	やや強	中
a当り玄米重(kg)		51.8	50.0
玄米	千粒重(g)	21.4	19.4
	腹白多少	ビ	ゴクビ
	心白多少	ゴクビ	ビ
	乳白多少	ゴクビ	ビ
	色沢	紺中	紺中
	光沢	良	良
米品質	上下	上下	

注) 調査年次は昭和49~52年の4カ年の成績

耐病性は愛知県総農山間技術実験農場、熊本県農試阿蘇分場、熊本県農試矢部分場、岡山県農試北部支場の成績。

ウネンワセ、越路早生などより強く、ほ場抵抗性についてはフクニシキと同程度かあるいはこれよりもやや強いものと思われる。白葉枯病にはコシヒカリよりもやや弱いが越路早生よりは強い。縞葉枯病はコシヒカリ、ホウネンワセよりも発生が少なく、紋枯病の発生はコシヒカリよりも多いが、ホウネンワセよりは少ない。耐冷性はフジミノりに近く、トワダよりも優るものと思われる。

穂発芽性はコシヒカリと同程度かもしくはやや劣るが穂発芽難に類している。生産力はコシヒカリ、ホウネンワセより高く比較的安定した収量性をもっている。食味はホウネンワセ並で良好である。

適地および奨励品種採用県

高知平野の早期栽培地帯を主とし、その他の早期栽培

地帯に適し、昭和53年度より高知県で奨励品種に採用され、3,000haの普及が見込まれている。

栽培上の注意

短程で比較的強程ではあるが、トヨニシキなどほどの強程ではないので多肥栽培では注意し、また紋枯病に弱いので注意し、特に倒伏とあわせて多肥栽培には留意する。早期栽培では刈りおくと玄米品質が劣悪化するので適期刈りにつとめる。

いもち病については Pi-Z 遺伝子をもっているので常に留意すること。

命名の由来

採用県である高知県の名勝地桂浜にちなみ早生種を意味する。